東日本大震災

その後が映画に

月日がたつと、人々の記憶は薄れがち。しかし、災害に遭った人たちには、一生忘れられない現実があります。そして、その現実を私たちも忘れてはいけません。

東日本大震災のその後を、現場を見た方の証言や映画を通して振り返り、被災者のために、これからの日本のために、できることから復興活動を始めましょう。

東日本大震災、そして原発事故から5年半。今年の夏、震災後、初めて私も浪江町の実家へ帰ってみた。

私の実家は避難準備区域で、通行証があれば、昼間はいつでも一時帰宅できる。ただし、基本的には住民で、今回は通行証に私の名前も追加する手続きをしてもらった。検問は2カ所。通行証と、住民でない私はパスポートを見せ、重々しく、バリケードを開けてもらう。検問所で放射線防止のため、靴カバー、帽子、手袋、マスクなどが入っている一時帰宅セットをもらう。

6年ぶりにこの目で見た我が家。この前、庭をきれいさっぱり除染してもらったというが、もう夏草が猛威を奮っている。震災から半年後、両親が初めて、一時帰宅した時も夏で、ツタが家を覆い、玄関を開けるのに、まずツタを払わなければならなかった。そのツタは室内にも蔓延り、今も、その枯れたツタが居間の窓枠からぶら下がっている。

外から見ると、住めそうな気もする家だが、中を見て愕然とした。震災後、帰宅できなくなった家。2011年3月のままのカレンダー。倒れて転がったままの日本人形やこけし。当時の地震の大きさがうかがい知れる。締めきった台所は、臭気を放ち、風呂場はカビだらけ、畳も腐って、グズグズと今にも足元から崩れそうである。放射線量はそれほど高くないはずだが、放射能が怖くて、暑くてもマスクをしないと気持ちが悪く、気のせいか頭が痛くなった。

本当にこの現状は情けないやら、悲しいやら、寂しいやら、夏の暑さの中、胸にぽっかりと穴が開いて、冷たい風が吹き抜けていくようだった。

今は廃墟となった誰もいない町をドライブした。町の中心部にある持ち家のひとつ。地震で倒れた塀がそのまま、道路と一体化している。家の軒を支える支柱も曲がったまま、傾いている。郊外にある家の方は、草が蔓延り、玄関まで行きつけない。よく遊んだアパートの敷地内もツタに覆われて、もう町全体が『眠りの森の美女』の古城のようである。

そこら中で、除染をしていて、農地など広い場所では除染中の登り旗が何本も立っている。除染作業員、放射線廃棄物を運ぶトラックは見かけるが、住んでいる人が全くいないという不思議。

両親の実家は両方共、帰宅困難区域で、帰れる望みはない。お盆に線香をあげに行くことはもうできない。行政は、来年の春には避難準備区域の住民が帰宅できるよう頑張っているらしいが、一体、どれだけの人が戻ってくるのか。町の復興は果たして実現するのかどうか。物理的には何とかなっても、人々に放射能に対する不安、原発への不信感がある限りは難しいだろう。帰りたくても、もう帰れないよね？と母がため息をついた。

原稿・写真：田河みどり

「残されし大地」
LA TERRE ABANDONNEE

この大震災そして、原発事故その後を映像に記録したベルギー人がいます。監督のジル・ローラン氏は、映画音響効果を担当するエンジニアでしたが、妻の故郷日本で起きた災害を映画にとドキュメンタリー映画を作製しました。福島の自然を彼の故郷Bouillon(ベルギー・リュクセンブルグ州)の自然と重ね合わせ、静寂の中に潜む原子力の恐怖におじけづくことなく撮影にいどみました。

© 鵜戸玲子

ローランさんは、映画の仕上げのため、ブリュッセルに来ていましたが、2016年3月22日ブリュッセルで起きたテロ事件の被害者となり、不幸にも亡くなられました。彼の意思を受け継ぎ、妻の鵜戸玲子さんをはじめ、友人たちが映画を完成させ、一般公開に至りました。「不条理な出来事にどう立ち向かうべきなのかをローランさんの作品を通して考えて欲しい」と、プロデューサー、シリル・ビバス氏の弁。是非、ご覧になって、まだ終わっていない、終わりのない原発の恐ろしさを理解してください。

日本語 － 字幕：仏・蘭語

映画写真提供：© CVB (Centre Vidéo de Bruxelles)

日時：
11月19日（土）17h30
11月21日（月）19h30
11月24日（木）17h30

場所 Place：
Flagey, Studio 5
Place Sainte Croix, 1050 Brussels

入場料 Price：
大人€7、26歳未満・60歳以上€5.5